

なし ナシヒメシンクイについて



図1 若齢幼虫



図2 幼虫の食入孔



図3 フェロモントラップに誘引された成虫



図4 交信攪乱剤

1 生態

ナシヒメシンクイはナシをはじめ、リンゴ、モモ、ウメ、ビワなど多数の果樹を加害する。成虫は体長約8mmで雄はそれよりやや小さい。体色は暗灰色をしており、前翅縁部には白斑がみられる。幼虫の体色はふ化直後では乳白色であるが、生育とともに淡桃色となる。頭部はいずれの時期も暗褐色であり、老熟すると体長は約12mmとなる。

成虫の発生はおよそ年4回みられる。卵は主に果実の梗窪やがく窪付近に産卵するが、有袋栽培では袋表面や果柄部にも行う。ふ化後の幼虫は直ちに果実へ食入する。果皮下を食害したのち、果実中心部へ移動し加害する。生育した幼虫は果実より離脱し樹皮の隙間などで蛹化する。

生育適温である25℃では、卵期間約7日、幼虫期間約18日、蛹期間約8日である。幼虫は果実のほか新梢も食害し、いわゆる芯折れ被害を発生させる。本虫の加害樹種は多く、春期はウメやモモ、夏期にはナシなど発生期間を通して加害樹種が存在する地域では発生が多くなる。

2 発生状況

越冬は老熟幼虫が粗皮の間などに繭をつくり行う。越冬世代成虫は4月頃より発生し、ウメ、モモ、サクラなどの葉裏や新梢に産卵し、孵化幼虫は枝先端部に食入し加害する。加害された枝はいわゆる芯折れ症状となる。その後の世代はナシ園へ飛来し産卵を行う。

年間の世代数は主に4世代と考えられ、世代を繰り返すたびに発生量は増加する。本県において各世代の成虫発生最盛期は、4月中旬、6月中旬、7月中旬、8月下旬頃（図5）に認められる。

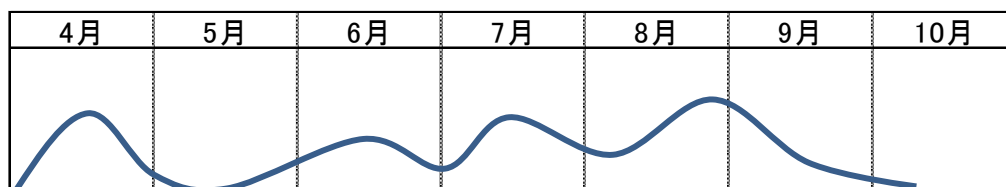


図5 ナシヒメシンクイ成虫発生消長

3 防除対策

(1) 適期防除

薬剤による防除適期は成虫発生最盛期より7～10日後である。

(2) 薬剤防除

幼虫が果実内に食入してからの防除では手遅れとなることが多いため、残効が期待できる薬剤を選択し、適期防除に努める。発生が多い時には追加防除を行う。

(3) 交信攪乱剤

交信攪乱剤を使用する場合は、越冬世代成虫の発生前から設置する。

(4) 被害部の除去

周辺のウメやモモなどで被害を受けた新梢・果実などの除去を徹底する。